

## 夫立会い分娩の効果と意識調査について

小 玉 和 恵, 大 川 美恵子, 宮 本 由美子

### はじめに

当院では昭和61年9月より、夫立会い分娩を希望する夫婦に対して、「このとり教室」を開設し分娩前教育を実施している。今回、指導内容の充実を図るため、受講後夫立会い分娩を行った夫婦とその分娩を取り扱った助産婦にアンケート調査を実施し、今後の課題を考察したので報告する。

### 研究目的

これまで行ってきた、このとり教室及び夫立会い分娩の指導の内容、方法について検討を加え、今後の問題点を明らかにすると共にその改善をはかる。

### 研究方法及び期間

昭和62年9月から平成元年8月までに、このとり教室受講後、夫立会い分娩を行った90組について、アンケート調査を行い、完全回収出来た45組について検討した。

### 結 果

表1に示した案内を外来の待合室に掲示して、月1回夫婦一緒に出席する講習会を開催し、夫立会い分娩の意義や効果を説明し、分娩の経過に沿って実際に呼吸法、補助動作、リラックス法を練習させてきた。

平成元年8月現在、このとり教室を受講した夫婦は138組であるが、うち夫立会い分娩を行ったのは90組(65%)であった。その背景を見ると、核家族84.4%に対して大家族15.6%、初産婦81.1%に対して経産婦18.9%と、夫婦だけで生活している初産婦が多い傾向がみられる。平均受講週数は妊娠33週、受講から分娩までの期間は6.3

週と練習には適当な時期、期間と思われた。

当院で昭和62年に分娩した451例を対照群として、比較を行った。夫立会い群の例数が少ないこともあり、出血量、仮死発生率、児体重には、有意差は認められなかった。妊娠中の体重増加に関しては夫立会い群の初産10.2kg、経産9.5kgに対して、対照群では初産11.8kg、経産11.4kgとなり、危険率1%で有意差を認め、立ち会い分娩群の体重増加が少ないことがわかった。これは、夫立会い分娩を希望する妊婦は、前向きに妊娠と取り組んでいるためと考えられる。

夫立会い分娩を行った夫婦に表2A, Bに示したようなアンケート調査を行い、完全回収の出来た45組に関して集計した。まず分娩直後の妻に対し、指導内容の有効度、実施度、夫の援助度について質問した。結果は図1に示したように各項目に関し8割以上が有効と認めているが、実施が6-

表1 このとり教室の案内

夫立ち会い分娩を希望される方は当教室を受講して下さい

- 1 受講対象  
妊娠33週から36週までの方で、妊婦が母親学級第I II III IV課を全て受講されており、ご夫婦揃って受講できる方。
- 2 日 時  
毎月第2土曜日 午後2時から4時まで
- 3 集合場所  
3階周産婦の面会ホールに、午後1時50分集合
- 4 持ってくるもの  
① 母親学級用テキスト  
② バスタオル  
③ 動きやすい服装(スカート以外)
- 5 申し込み方法  
申し込み用紙に、受講の動機を必ず明記の上、外来窓口に提出して下さい。

表 2-A 夫へのアンケート

◆◆◆御出産おめでとうございます◆◆◆

アンケートにご協力下さい

氏名 \_\_\_\_\_

- 1 このとり教室受講後練習しましたか

(○をつけてください)

	練習しない	練習した	練習回数		
			毎日	1~2/週	その他
呼吸法の声がけ					
補助動作の手助け					
リラックスへの声がけ					
努責の声がけ					

- 2 分娩進行中いつから付き添いましたか

- 3 分娩進行中は手助けできましたか

(○をつけてください)

	手助けできた	手助けできなかった
呼吸法の声がけ		
補助動作の手助け		
リラックスへの声がけ		
努責の声がけ		
一連の世話(汗拭き等)		
その他		

- 4 赤ちゃんを最初に見た時どう思いましたか 分娩に立ち会っての感想は？

- 5 これから日常生活の育児の中でどんな手助けをしたいと思いますか

- ・手助けしない 理由 \_\_\_\_\_
- ・手助けできない 理由 \_\_\_\_\_

a 授乳の手伝い

b オムツ交換

c 子守

d 留守番(子供と一緒に)

e 洗濯

f 掃除

g 食事のしたく

h 赤ちゃんの入浴の世話

i 買物

j その他 ( \_\_\_\_\_ )

- 6 分娩終了後の妻にどんな言葉をかけましたか

- 7 分娩を終えて医療関係者に話したいことはありませんか

医師に対して

助産婦に対して

皆様の貴重な御意見を参考とし、わかりやすく効果的な指導をめざして“このとり教室”の発展のため尽力して行きたいと思っております。

御協力ありがとうございました！

表2-B 妻へのアンケート

☆☆☆御出産おめでとうございます☆☆☆

アンケートに御協力下さい

氏名 \_\_\_\_\_

- 1 分娩進行中からお産まで何が役立ち、またできましたか  
(○をつけて下さい)

	役立った	役立たない	できた	できない
a 呼吸法				
b 補助動作				
c リラックス				
d 努責				

- 2 分娩進行中に夫の援助があったことはなんですか  
(○をつけてください)

(○をつけてください)

- a 呼吸法の声かけ  
b 補助動作の援助  
c リラックスへの声かけ  
d 努責の声かけ  
e 汗を拭いてもらったり、水を飲ませてもらったりの一連の世話  
f その他

- 3 夫が援助してくれたことで、何が一番助かりましたか

- 4 夫に立ち会ってもらっていかがでしたか

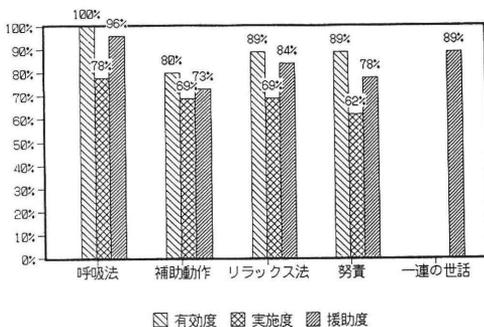


図1. 妻へのアンケート結果

8割にとどまっており、指導、練習両面での不足が考えられた。夫の援助に関しては7割強が援助されたとしており、夫が単なる傍観者に終わる事なく、積極的に援助し共に分娩に関わっている姿勢がうかがわれた。

夫から受けた援助で何が一番有効かに関しては、呼吸法34%、補助動作33%、心理的効果33%と3つがほぼ同じ割合で有効とされていた。しか

し前述の夫の援助度の点で補助動作が他の項目と比較して低いことを考え合わせると、夫の援助が妻からの欲求に比べ不足していることがわかった。今後、夫に対し補助動作が陣痛緩和に効果が大きいことを理解できるよう、さらに指導して行きたいと思われた。

立ち会い助産婦からの客観的評価を見ると、各方法とも、妻の達成度、夫の援助度が「医療者からの助言により出来た」を含めると7-9割が達成されていた。これは1回のみでの指導の限界と再指導の必要性を示していると考えられた(図2)。

夫に対して、各項目の練習度、達成度についてみると、呼吸法に関しては、9割が練習したとしているのに対して、努責に関しては5割となり、あまり練習されていないことがわかった。これは、妊娠30-36週の受講時には、指導中に努責の実感がわからず、そのため次第に練習が遠のいてしまうためと思われた。しかし、達成度に関しては練習が不足しているにも関わらず、高率を示していた。分

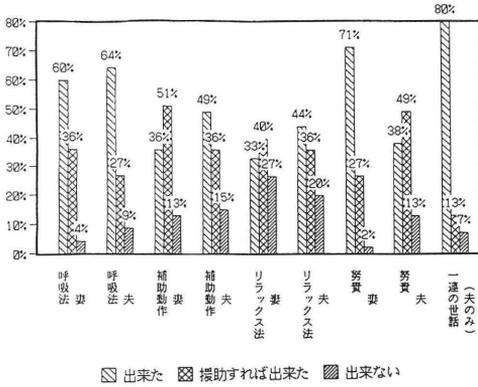


図 2. 助産婦の評価

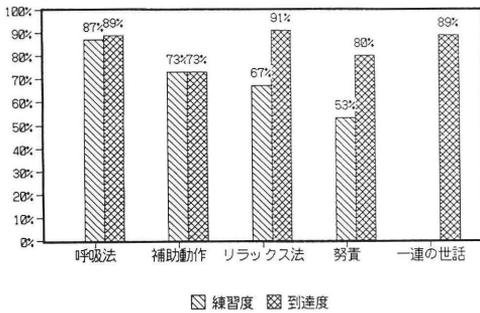


図 3. 夫へのアンケート結果

娩直後の興奮した精神状態も加味されていると考えられるが、夫が分娩中に協力できたと満足しているものと思われた。努責、リラックス法は練習度と反しているが、先の助産婦の評価からの「助言すれば7-8割が出来ていること」を考え合わせると、分娩時助産婦が再指導している成果と考えられた (図 3)。

### 考 察

このとり教室の今後について考えると、現在1回の受講回数を、練習の到達度を把握するためにも妊娠35-36週にもう一度教室を設けることが望ましいと考えられた。その第一歩として、平成

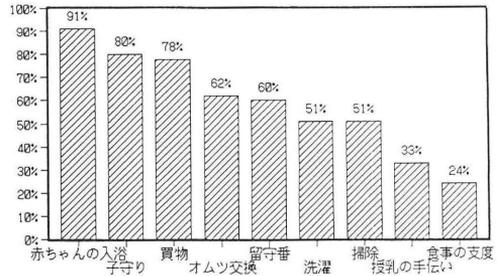


図 4. これからの生活でどんな手助けがしたいか

元年5月から病棟勤務助産婦16名全員で指導に当たり、また指導内容に関するスタッフ間の統一を図っている。また陣痛、腰痛に関して考えると、夫は痛みの自覚がむずかしく、そのため練習も不十分になりやすいので、指導の際痛みの原因や度合についてさらに十分に説明していく必要があると思われた。

最後に、分娩に立ち会った感想をまとめると、全例が「立ち会ってよかった」としていた。夫婦が出産をとともに出来た事を喜びとし、感動を共有していることがうかがえ、子供を生むことの大変さを知りその経験を今後の生活や育児に生かして行くだらうと思われた。図 4 に示す通り、家事育児に関しても夫の協力的な気持ちがうかがわれた。また一連の世話に関しては、細かな手助けはやはり遠慮のない夫や身内が最適者と考えられ、日常生活延長線上に分娩があり、家庭的な雰囲気の中で分娩するという理想に近づいていると思われた。

### おわりに

以上アンケートを基に当院で行っている夫立会い分娩に関して検討してみたが、これからもよりよい分娩を目指し、さらに改善して行きたいと考えている。